

## 保育者養成カリキュラムの構造化に関する取り組み

教員間の授業内容の調整による構造化の実現

松原 勝敏・西浦 和樹・坪井 貴子

井上 範子・柴田 玲子

池内 裕二・田中 美季

### Structurizing of Curriculum for the students of teacher-training course of early childhood care and education in junior college

— The result of the project —

Katsutoshi Matsubara, Kazuki Nishiura, Takako Tsuboi

Noriko Inoue, Reiko Shibata

Yuji Ikeuchi and Miki Tanaka

Recently, improving a Curriculum of university has been one of the matters of serious concern. We intend to structurize the curriculum of teacher training course of our junior college, and to build up an efficient curriculum to help the students to acquire the knowleges and skills for early childhood care and education. And, on the other hand, we hope that all teachers (professeeor, assistant professor etc.) understand the object and characteristics of our curriculum, and that they do the best for doing their duties.

The purpose of this article is to show the result of the project.

はじめに

本報告は、本学紀要第39号において報告した「保育者養成カリキュラムの構造化に関する取り組み」の続編である。

今回、一応の結果を出した本学保育学科の「保育者養成カリキュラムの構造化」プロジェクトは、平成12年度に日本私立学校振興・共済事業団に対して「教育・学習方法等改善支援経費」の申請を機に開始された。まず、平成12年度には、本学幼児教育学科（当時）に入学してくる学生へ向けたガイダンス冊子「これから仲間となるみなさんへ」の作成・配布、本学の保育者養成カリキュラムの解説冊子「カリキュラムの考え方と特色」の作成・配布を行った。これらの資料作成は、本学幼児教育学科（当時）に入学してくる学生が

本学における保育者養成カリキュラムの全体像を理解することによって、学生一人ひとりに意欲的な学習態度が形成されることを第一の目的としていた。また、第二の目的として、本学幼児教育学科（当時）の専任教員はもちろんのこと、本学の他学科に属しつつ保育者養成のための授業科目を担当する教員や非常勤講師に向けて、本学の目指す保育者養成とそのカリキュラム構成の意図に関する理解促進を図り、個々の教員の学生指導における自己改善努力と本学が目指す保育者養成の目的を達成するための協力を求めることをねらっていた。

平成13年度には、新カリキュラムの策定を機として、学習内容の消化不良対策やいびつな時間割の改善、研究室担当教員による指導の強化を図って新カリキュラムを完成させた。

そして、平成14年度には、それぞれの教員の授業内容の連絡・調整の必要性についてその認識の深化を図り、学科会議を利用して検討を続け、その結果を新たに、冊子「カリキュラムの考え方と特色」にまとめた。

本稿では、以上の経過を通して完成させた、冊子「カリキュラムの考え方と特色」に若干の解説を加えるものである。なお、本来であれば、詳細な経過や考え方、あるいはプロジェクトを進めていく上での問題点などを記載すべきであるけれども、紙幅の関係上、それらの点については以後の報告に譲らせていただき、まずは冊子の内容をここに報告したい。

なお、本報告は、その本文を学科長である松原が事業責任者として執筆するけれども、当然の事ながら、本稿で報告する事業の成果は、本学保育学科に属する研究室担当教員全員による、教育・学習方法等改善のための真摯な努力の結果である。

### 保育者養成カリキュラムの構造化の観点

保育者養成カリキュラムの構造化にあたっては、そのポイントを試案として本学紀要第39号に記しておいた。まずは、それを今一度振り返っておきたい。

まず前提となるのは、本学の保育者養成カリキュラム全体に、全教員が連携・協力体制を構築することによってカリキュラムの構造化を図るということであった。そこで、本学が目指す保育者養成を達成するために編成されたカリキュラムの概念を研究室担当教員全員で、今一度確認した（図1）。そして、本学の保育者養成カリキュラムは、建学の精神を基盤として、実習を中心に、他の関連諸科目が有機的に関連することを目指していることの共通理解を深めた。

第二に、2年間の学習課程において、保育者養成のための学科目や研究室活動の流れやウェイトを図式化することによって、それぞれの教員が担当する授業科目が、食事にたと

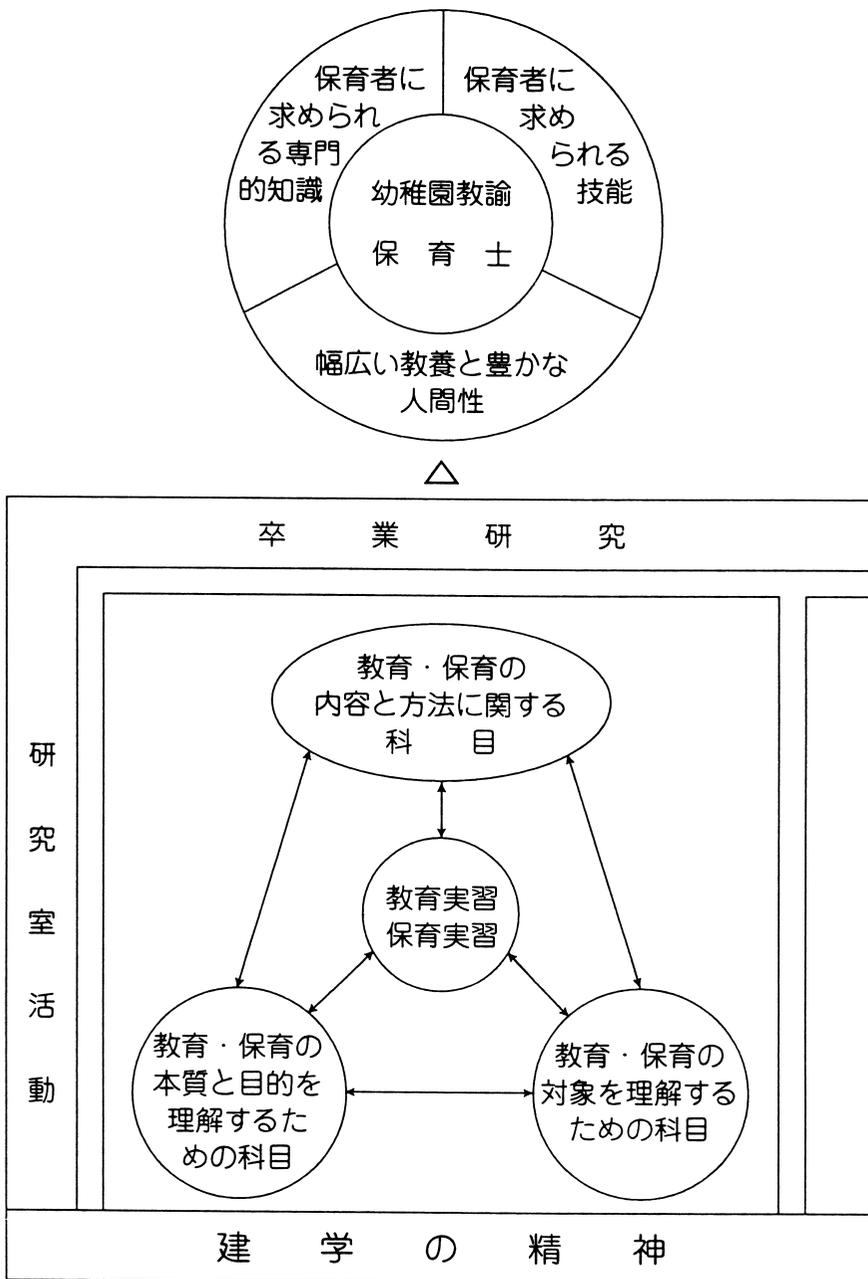


図1 カリキュラムの概念図

えるなら、趣味や嗜好の異なる様々な料理人によって提供される単品の料理ではなく、一つのコース料理として全体の調和を考慮して教育サービスが学生に提供されるように、個々の教員が授業内容を工夫することを確認した（図2）。

そして、第三に、カリキュラムの柱となるものを二つ確認した。その柱とは、一つが本学保育学科の優れた特色である、他校に比してはるかに充実した実習を中心とした実践力の育成である。こうして、系統立てられた実習を中心に、他の諸科目のすべてが、実習担当教員との密な連携をはかりながら展開されることをねらった（図3 - 1）。

もう一つは、自己教育力育成を目指したカリキュラムの柱である。保育者養成は、過去の即席養成に陥ってはならず、それゆえ、単なる小手先の保育技術の習得に満足するものであってはならない。本学保育学科では、今後もますます多様化する保育ニーズに、主体的に対応することのできる能力の育成を目指している。そこで、本学の学生指導における優れた特色である、本学の建学の精神に基づいた研究室制度を基盤として、学生たちの研究能力の育成を図り、保育者として、現場において、生涯にわたって保育する力を磨き続けることのできる力の育成をねらった（図3 - 2）。

最後に第四のポイントとして、個々の教員が、本学保育者養成カリキュラムの概念を正確に理解し、本学における2年間の学習課程の系統の中に自分の授業を的確に位置づけることを目指した。この際、注目していただきたいのは、個々の教員が本学の保育者養成カリキュラムの流れの中に「取り込まれる」のではなく、「主体的に参画する」ことを重視したことである。そのために、本学紀要第39号でも報告したとおり、授業科目の履修セメスターを調整することによって研究室を担当する専任教員全員が、2年間継続して学生の指導にあたることができるように工夫をした。そして、その2年間に渡る継続的指導において、個々の教員が学生指導に当たる際のテーマを決めたことである。こうすることによって、個々の教員の教育責任を明確にすることができるとともに、個々の教員のより主体的な保育者養成への力量の発揮を目指したのである。

以上のような観点をもって、本学保育学科に属する研究室担当の教員は、2年間の学習課程の共通枠を前提として、個々にその枠の中に自らのテーマをもった主体的指導課程を位置づけた。もちろん、繰り返しになるが、本学の優れた特徴である充実した実習を柱として、個々の教員は授業内容を実習との関連を十分に考慮して検討することとなっている。そこで、全教員が、2年間の学習課程の共通枠の中に、自らの授業科目を位置づけることで意見が一致した。こうしてできあがった成果が、次に示す図4 - 1 ~ 7である。

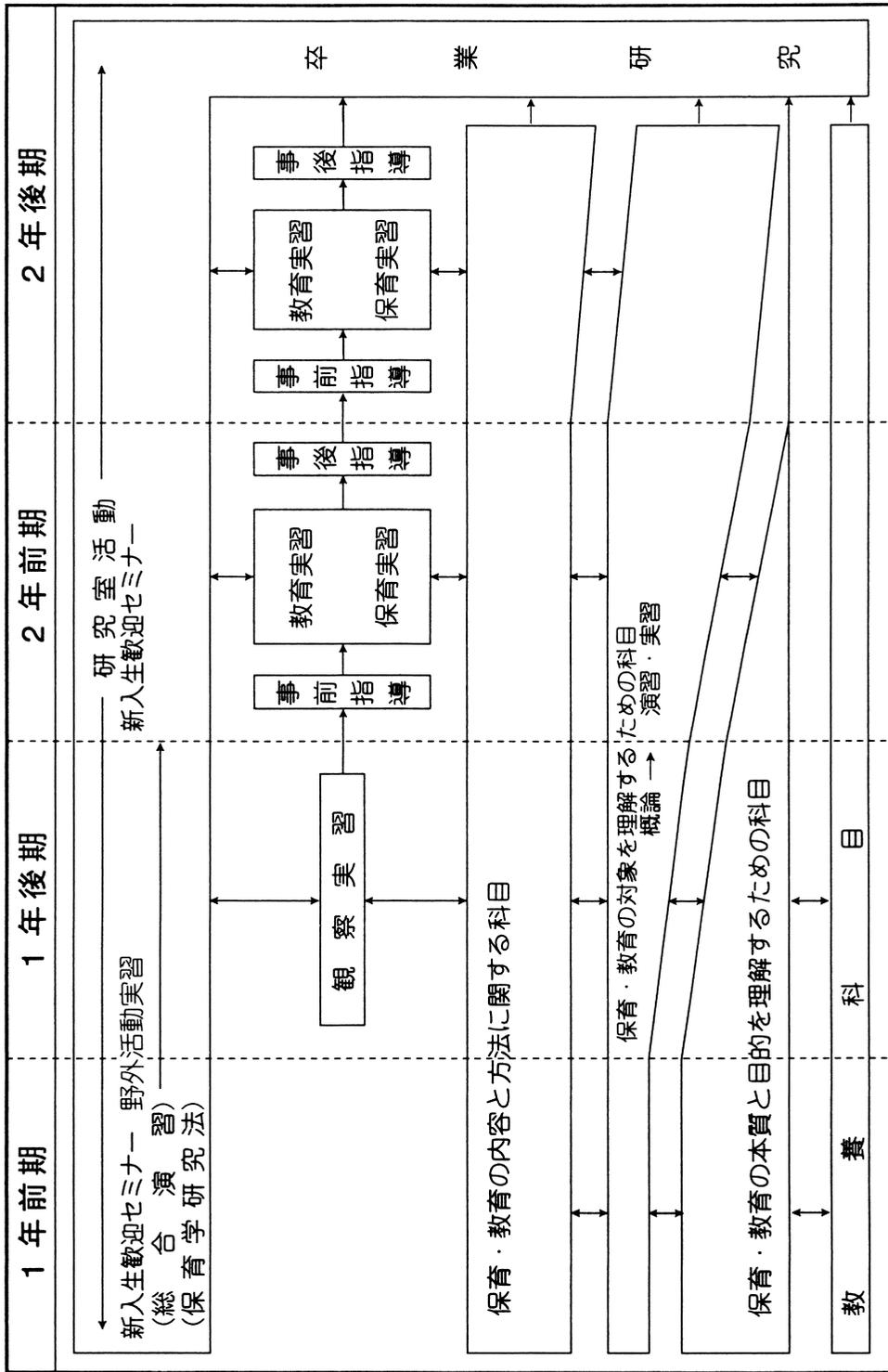


図2 保育学科カリキュラム系統概念図

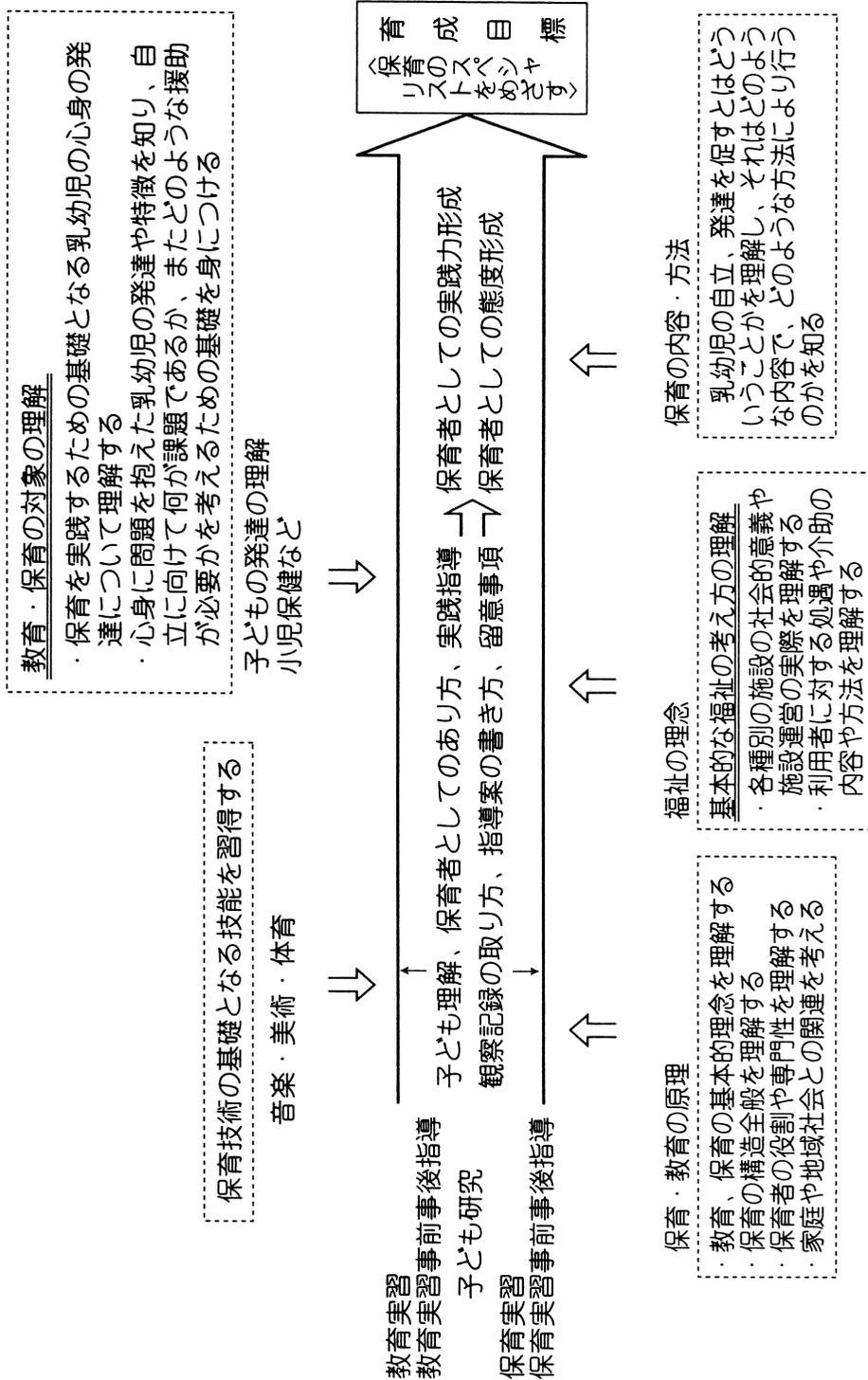


図 3-1 構造化された保育者養成カリキュラムの概念図 ① 実習を中心とした実践力の育成

保育学科では、自ら学び、自ら保育の力量を高めるべく、研究するための力の形成を目指しています。

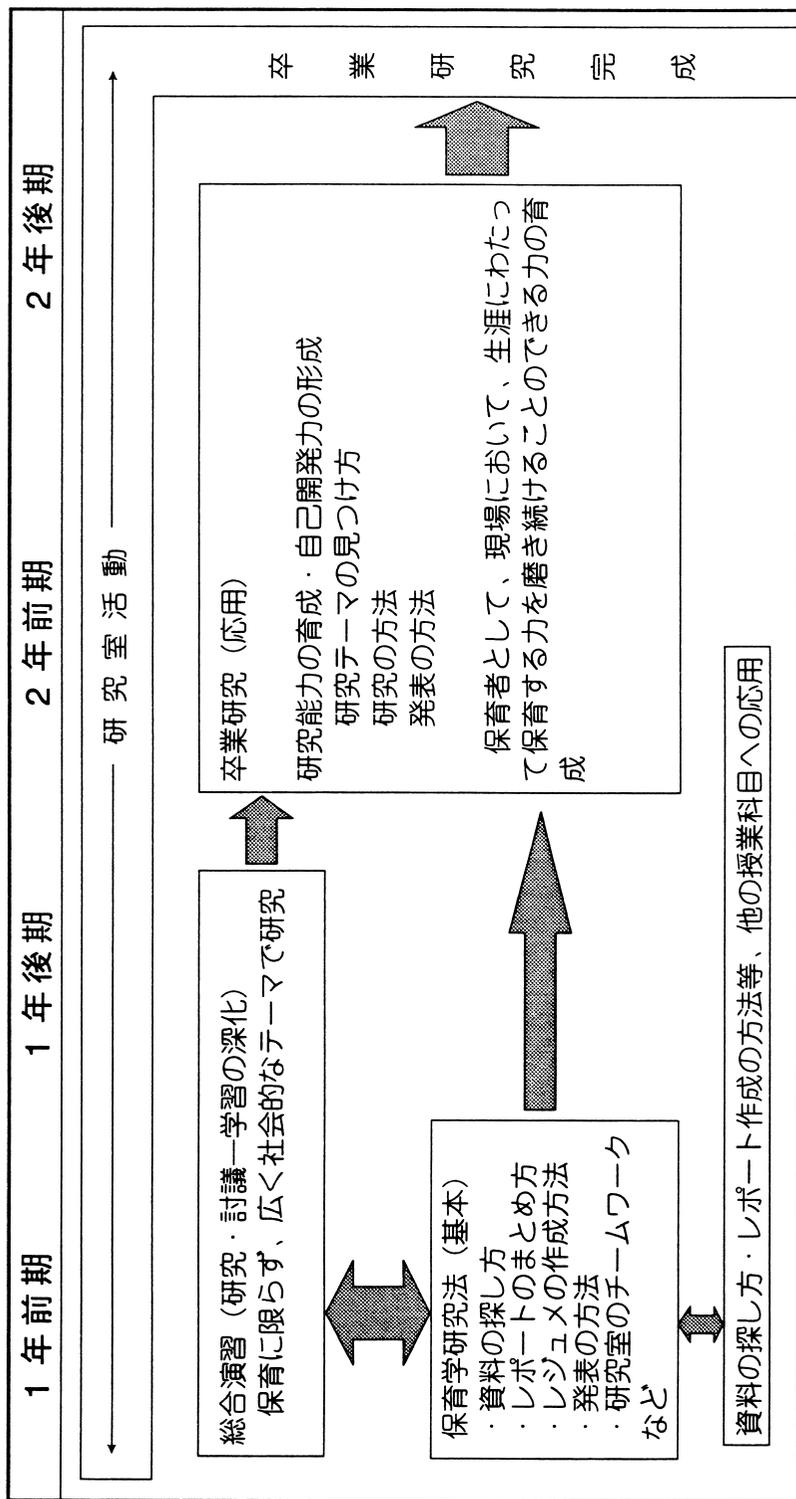


図 3-2 構造化された保育者養成カリキュラムの概念図 ②保育者に求められる自己教育力の育成

松原勝敏 (MATSUBARA Katsutoshi)

私の授業では、保育者としての基礎知識の獲得を通して、「保育者としての態度形成」をはかることをテーマに2年間の授業を考えています。実習の事前事後指導や実習との連携をはかりながら、理論や制度がどのように保育の現場を支えているかを見つけていきたいと思います！  
そして、保育の理論と実践の二つの面をしっかりと身につけた保育者になってください！

(保育者としての態度形成)

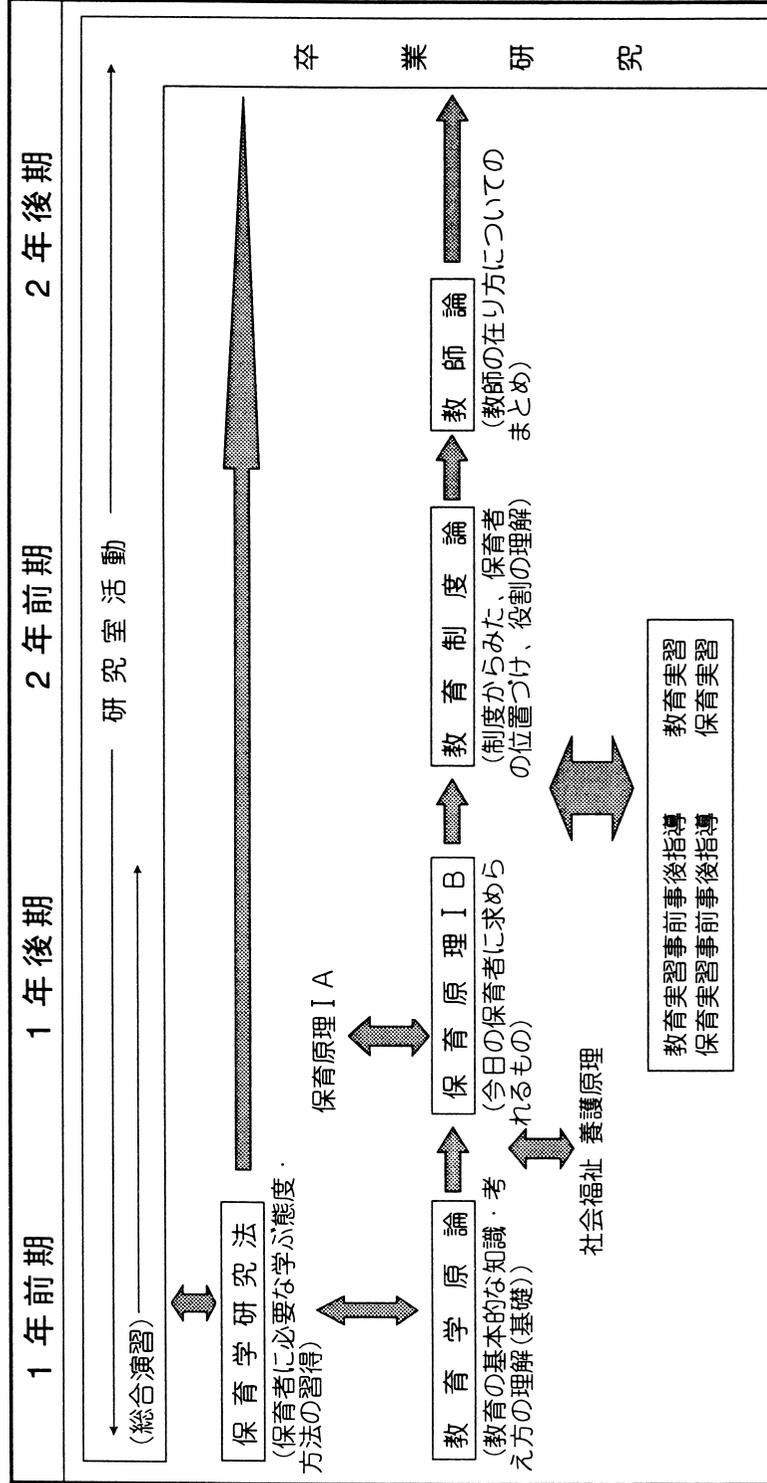


図 4 - 1 構造化された保育者養成カリキュラムの概念図 ③教員個人の指導の系統性 1

西浦和樹 (NISHIURA Kazuki)

私が担当する授業は、コンピュータを使った情報系の授業、心の動きを講義する心理学系の授業です。情報系の授業では、便利なパソコンの使い方の習得を目指します。携帯電話のメールと同じで、1年ほどかければそこそこ使いこなせるようになるでしょう。心理学の授業では、保育現場で子ども心の動きを理解できるように、ごくごく基本的な事柄を学ぶことができます。すべては、総合学習や卒業研究につながるが、保育現場でも役立つでしょう。

(教養、保育の対象の理解)

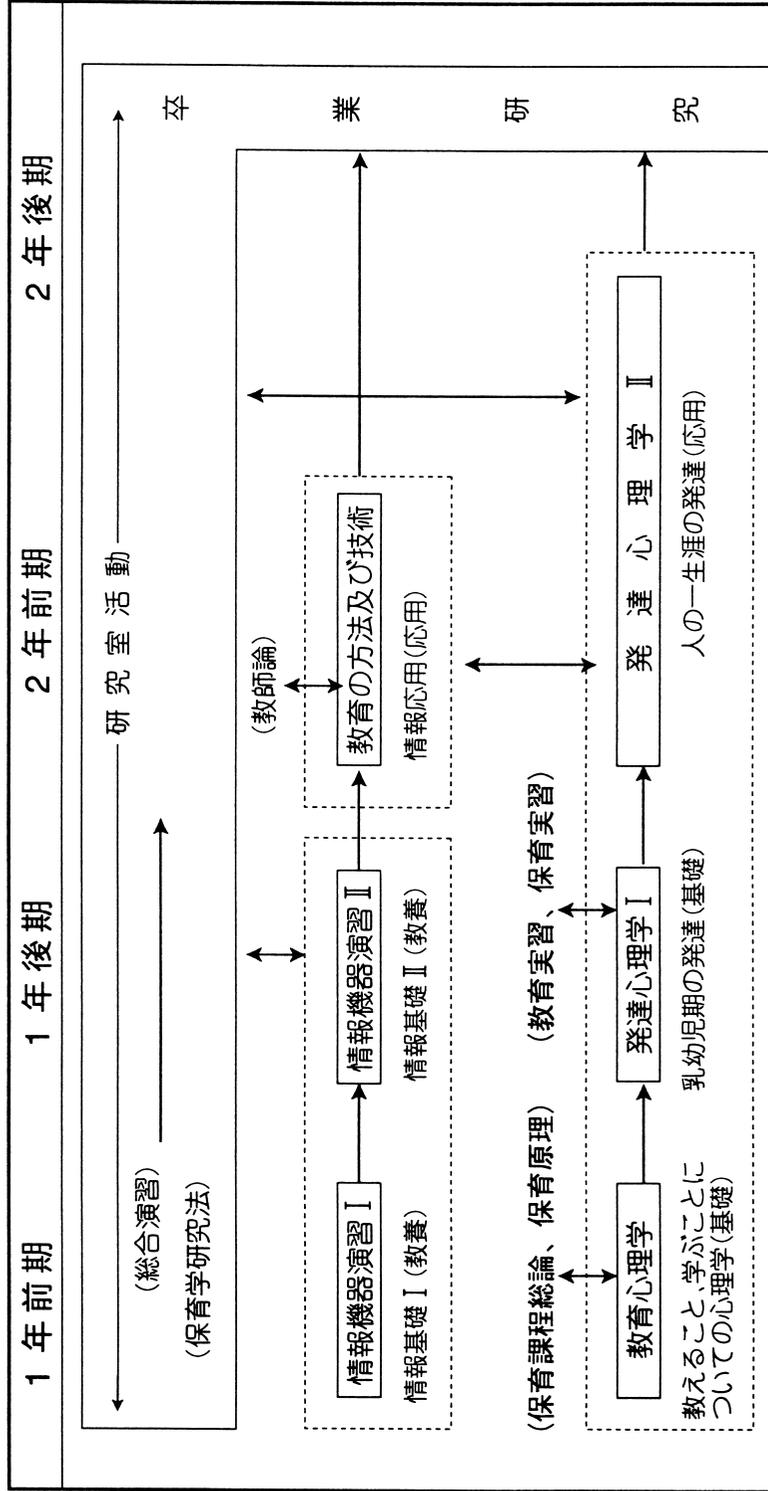


図 4-2 構造化された保育者養成カリキュラムの概念図 ③教員個人の指導の系統性 2

坪井貴子 (TSUBOI Takako)

担当科目が、カリキュラム系列中、「教育・保育の本質と目的」、「教育・保育の内容と方法」、「実習」にわたるため、2年間で保育を総合的に扱い、理論、実践両面から保育の専門性を養う。さらに、保育に関する学習や実習を通して、子どもの発達や生活の重要性を理解し、自分自身の見直しをはかってほしい。

(保育の基礎を培い、  
人間性の育成をはかる)

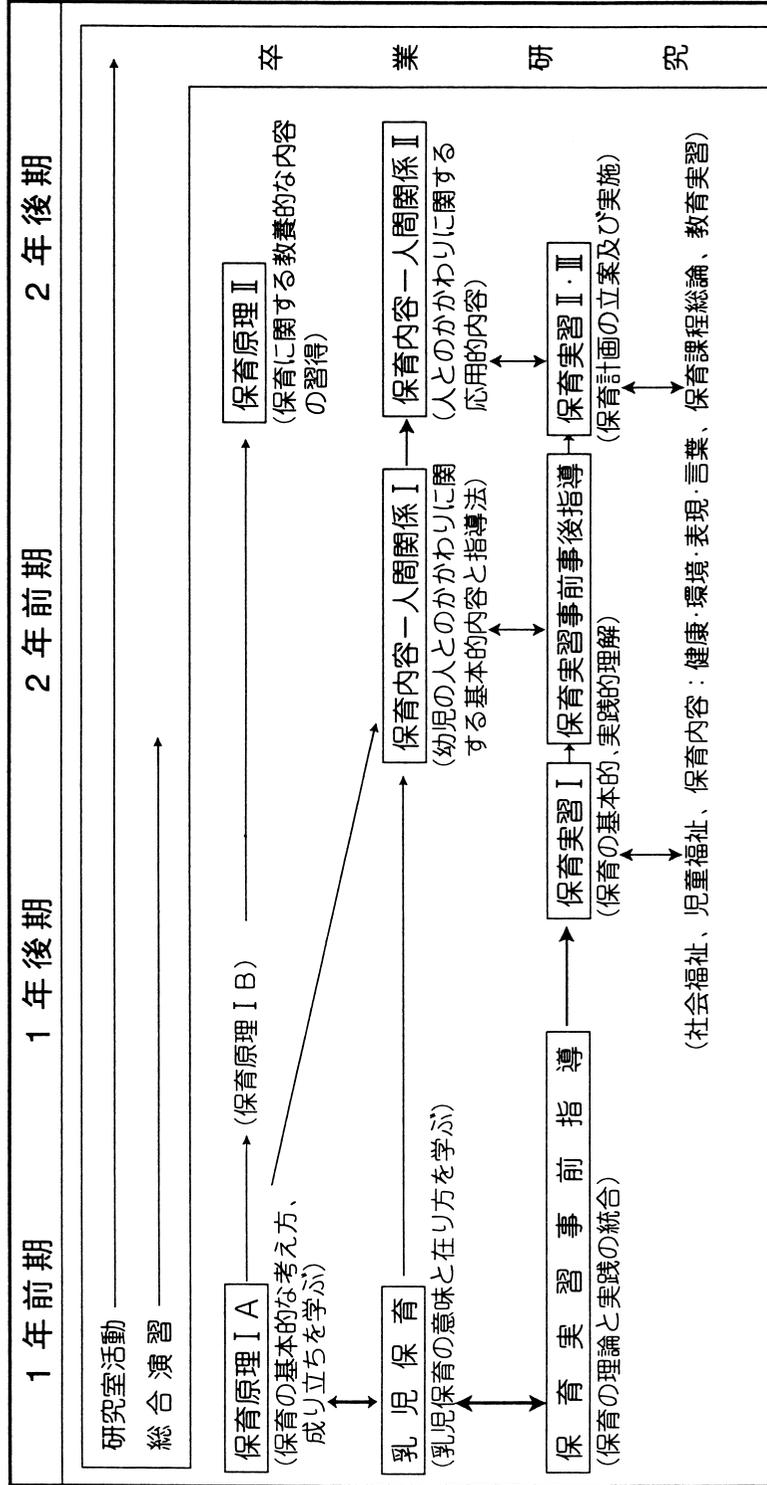


図 4-3 構造化された保育者養成カリキュラムの概念図 ③ 教員個人の指導の系統性 3

井上範子 (INOUE Noriko)

私の授業では、私自身が現場を預かっている関係上「保育者はこうあってほしい」との思いを込めて授業を進めています。保育者は、常に全人格をさらけ出して子どもと直接ふれあって生活するので、大いに自分磨きに努めましょう。

(実習をとおして豊かな  
人間性の育成を目指す)

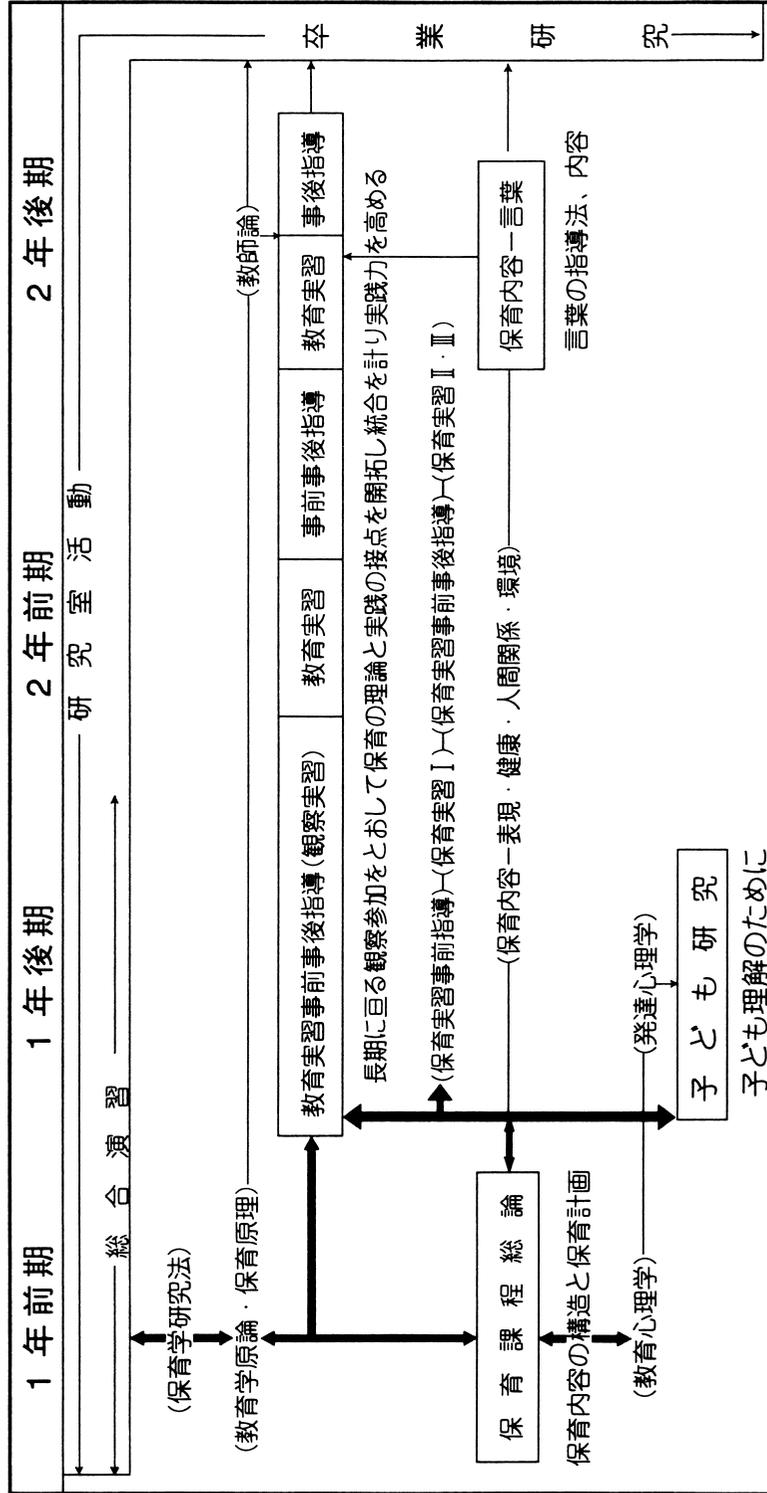


図 4-4 構造化された保育者養成カリキュラムの概念図 ③教員個人の指導の系統性 4

柴田玲子 (SHIBATA Reiko)

子どもはみんな音楽が大好きです。生活の中のあるゆる場で、聞こえてくる音に敏感です。歌をうたってピアノで伴奏するだけでなく、広い意味で音楽を使うことのできる心用力を身につけ、心の通う保育を目ざしてほしいと思います。

(音楽を中心とした  
保育技術の獲得)

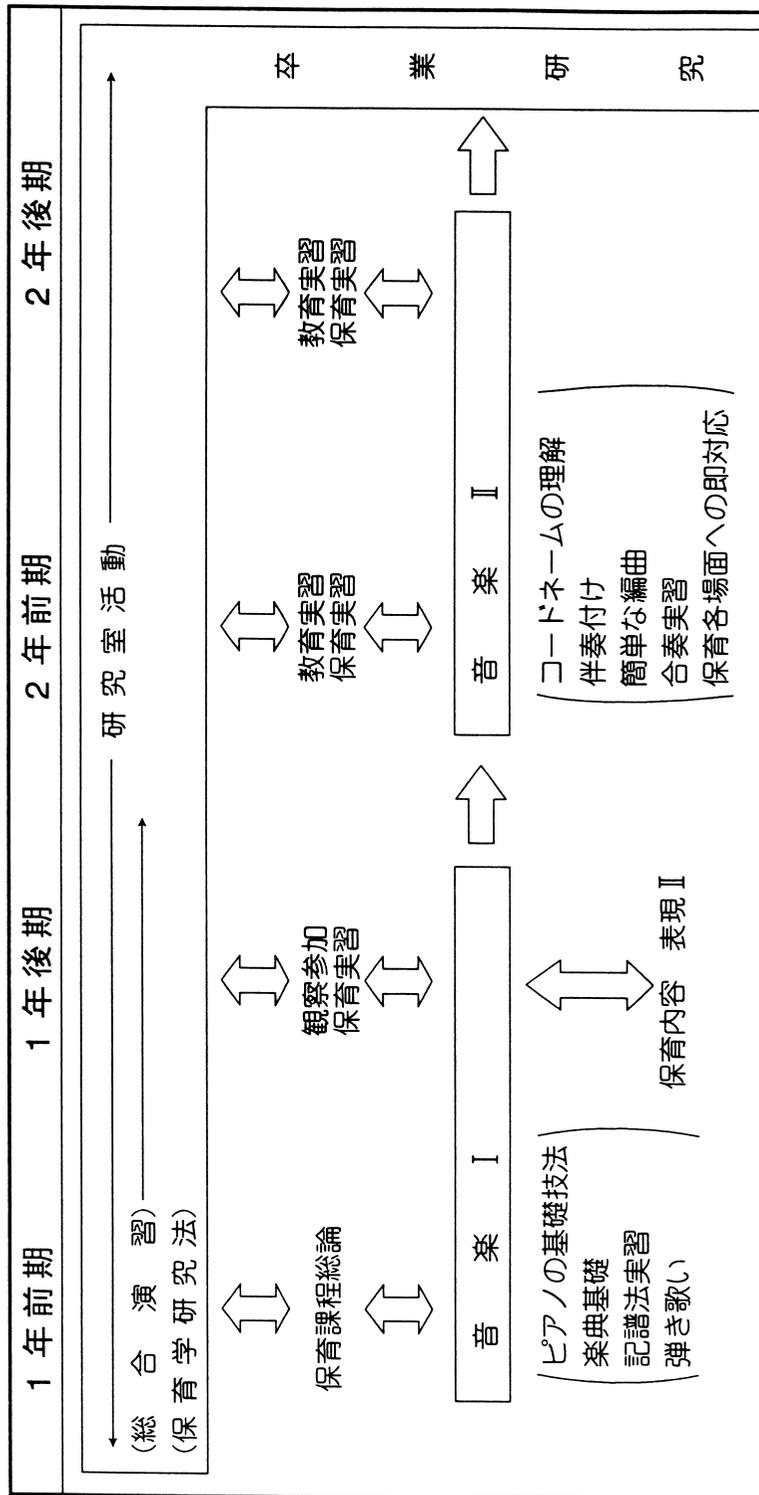


図 4-5 構造化された保育者養成カリキュラムの概念図 ③教員個人の指導の系統性 5

(明るく元気な  
保育者の育成を目指す)

池内 裕二 (IKEUCHI Yuji)

年齢に見合った運動遊びにはどのようなものがあるか調べる。運動遊びを楽しく安全に行うための指導・援助の仕方を学ぶ授業です。  
また、保育者自身が健康の大切さを理解し運動の楽しさ、喜びを体験し生涯にわたって日常生活の中で運動を行う態度を育てる。

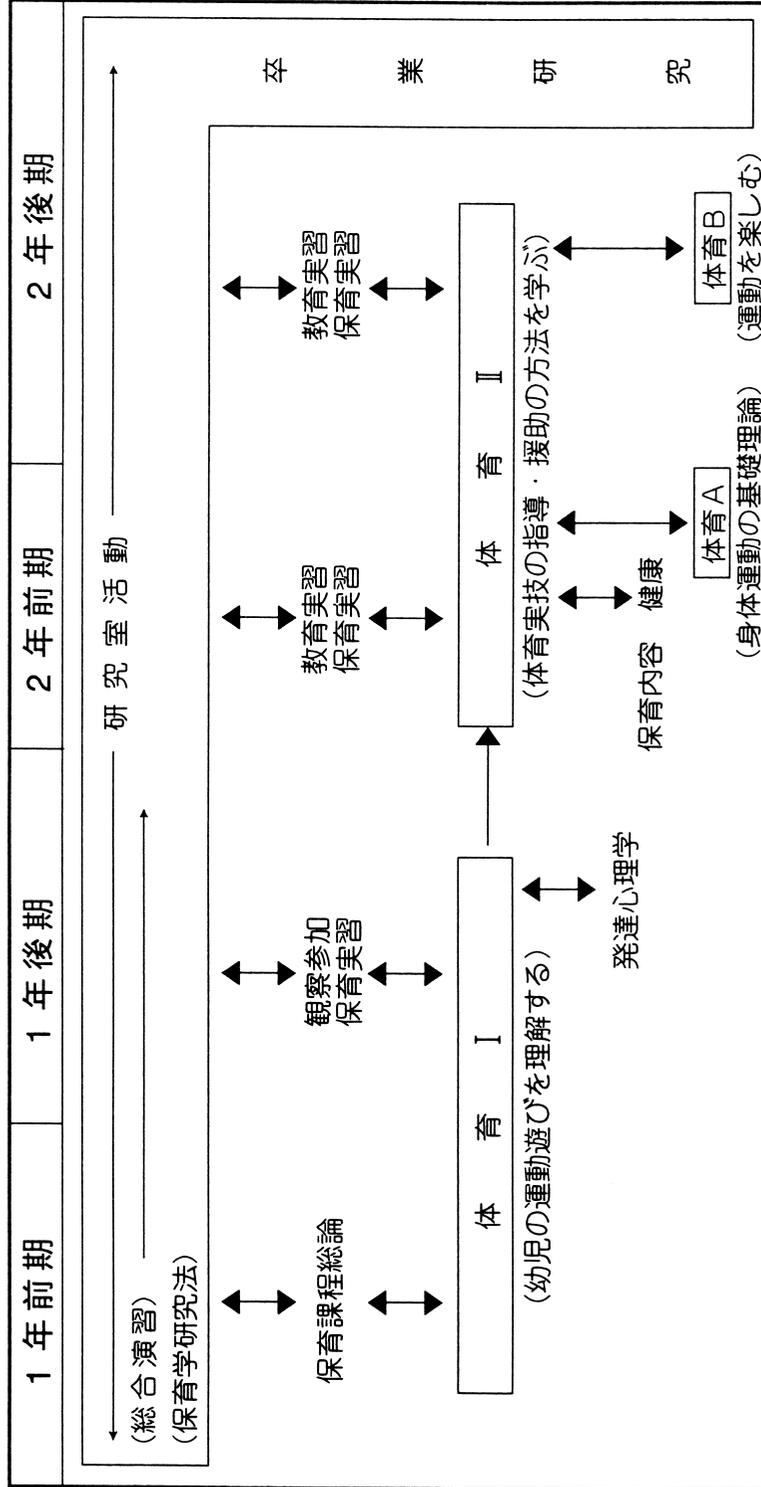


図 4-6 構造化された保育者養成カリキュラムの概念図 ③教員個人の指導の系統性 6



おわりに

最初にも述べたように、紙幅の関係上、本事業の成果の一部を示すことによって本報告を終えなければならない。より詳細な報告は、機会があれば是非とも行いたいと考えている。

ところで、保育者養成カリキュラムの構造化のための最終年度における話し合いで、これまで、ややもするとタブーとされた他の教員の授業に意見することが、自然とできるようになったことは確かな成果であると思われる。これはどこの大学においても見られる光景であろうが、ある授業科目の担当教員がいないところで、その教員の授業内容について批判する場面は多々見られた。このような状態では、その批判は単なる陰口で終わってしまうけれども、学科会議の場で表に出された批判となれば、もやはそれは陰口ではなく、保育者養成にともに尽力するパートナーに対する建設的な意見・助言となる。

本学保育学科は、本事業を通して、いわゆる雑居ビルのテナントから教育の目的を明確に掲げた組織体へと着実に進化しつつあることは確かである。

なお、本事業の過程で、本学保育学科の人的資源の問題も明らかになってきた。これも本学保育学科のような地方の小規模私立短大ではどこでも見られることであろうが、少人数で多くの授業科目を担当しないといけないので、やむを得ず個々の教員は自分の専門に隣接する分野あるいは若干隔たりを有する科目を担当しなければならない。それゆえ、本学保育学科が目指す保育者養成を実現するためには、本学の現有スタッフではカバーできない領域が見えてきた。その領域は、本稿で言及することを避けるが、非常勤講師で対応するには問題を有する領域である。

高校以下の学校教育においては、自主的自律的学校運営のために教員スタッフ人事の裁量がクローズアップされるが、本学保育学科において今後検討されるべき課題となっている。

\*本プロジェクトは、日本私立学校振興・共済事業団の「私立大学等経常費補助金特別補助」に関して「教育・学習方法等の改善」に採択され、平成12年度から14年度の3年間にわたって補助金を受けて行われた事業である。

高松大学紀要

第 40 号

平成15年 9月25日 印刷

平成15年 9月28日 発行

編集発行 高松大学  
高松短期大学  
〒761-0194 高松市春日町960番地  
TEL (087) 841 - 3255  
FAX (087) 841 - 3064

印刷 株式会社 美巧社  
高松市多賀町 1 - 8 - 10  
TEL (087) 833 - 5811